

# 彼らのために私は何ができるのか

三宅清子女史は台湾政治犯の救援活動における掛け替えのない人物の一人である。最初は人道主義に基づいた暖かい気持ちで第一線で活動をしておられたが、その後、密告を受け日本に戻らざるをえなかった。しかし、継続的に海外で救援活動を行っておられた。その救援活動は幅広く展開され、重なる困難に直面しながらも、孤独で危険に満ちたいばらの道を長期にわたって奔走して来られた。平凡ながら崇高な志を持たれる三宅女史の、報いを望まぬ功績に台湾人は永遠に感謝している。

私は1960年代末期から1970年代前半までの約8～9年台湾に住んでおりました。当時の台湾は中国本土と「交戦状態」であるという設定のもと1949年から布告された戒厳令の真っ只中で、国民の一切の政治活動を封じ、基本的人権を奪い、戒厳令を思いのままに拡大解釈、乱用して、大量の政治犯を逮捕、人権弾圧のすさまじい恐怖の時代でした。

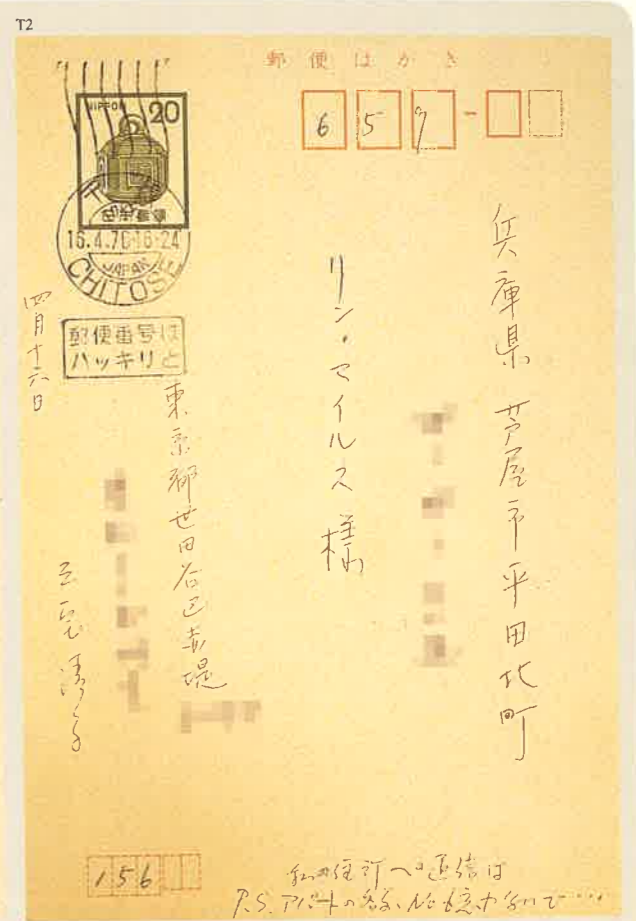
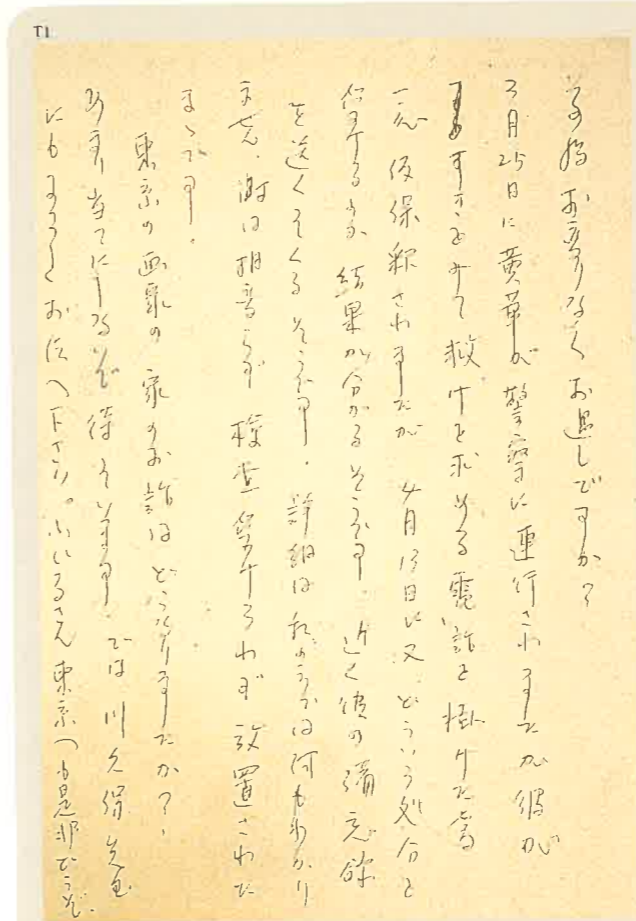
当時も日本からの買春目的の観光客や、金儲けをたくらむ商売人は年間五、六十万人が来台しており戒厳令下であるのにそれらしい雰囲気がないと雑誌などに紹介されていました。観光客などが見ようともしなかった当時の蔣政権の裏の面は、国民党による一党独裁で、反攻大陸をスローガンに強固な反共主義政策をとり、国の隅々まで特務組織をはりめぐらせ、一言の政府批評も共産主義者、台湾独立主義者のレッテルをはり重刑に処す時代でした。

私自身がその恐怖政治の一端を知る直接のきっかけは、彭明敏教授と共に「台湾人民自救宣言」を起草した謝聰敏や魏廷朝が刑期を終えて出獄して間もない頃に知り合い、彼らから政治監獄の実態を聞きました。彼らは間もなく彭教授が秘密裏に台湾を脱出したことから特務の監視下におかれ、間もなく全く身に覚えが無い罪状で再逮捕されました。

その逮捕直前、身に危険を感じた謝聰敏が私に新聞紙にくるんだ『台湾青年』と政治犯のリストを預かって欲しいと託されました。彼らの逮捕を知りすぐさまそのリストを書き写し、一部を当時日本に帰国する外交官に内容を告げずに『台湾青年』の東京の住所に届けるよう頼みました。私は自分の手元にある政治犯のリストを基に政治犯の家族を探し、その現状を知ろうと行動を開始しました。

政治犯の置かれている惨状を知るにつけ、自分に何が出来るかを考えた時、この事実を出来るだけ調査して海外に知らせ、国際的な圧力で国民党の人権弾圧がやりにくくするしかないと考えました

なぜ日本の女がただ一人でその当時誰も懼れて口にさえしない政治犯の救援に立ち向かったのかとよく聞かれますが、私の言いたいのは日本人だから出来たのです。同じ事を台湾の人がやればたちまち逮捕され殺されるでしょう。外国人に対してはやはりワンクッションを置くのではないかと思いました。しかも私は外の世界と繋がっている、自分しか出来ないと考えました。といっても危険極まりない活動には違いなく他に協力者を求めることも出来ず、当初は一人でやるしかなかったのです。当時「歯ブラシ主義」という言葉が流行っていました。つまり



1976年4月、三宅清子女史は東京から兵庫県在住のリン・マイルス氏に手紙で黄華氏が台湾の警察に逮捕拘留されたことを伝えた。

利権や汚職で肥え太った国民党の政府高官や、官僚、財閥がその資産を外国に移し、家族を外国に住ませ、自分はことあればいつでも歯ブラシ一本で外国に高飛びすることを皮肉ったものです。

実は私も歯ブラシ主義でした。といっても私の行き着く先は台湾の監獄、いつ逮捕されてもよいように身辺を整理し、まだ幼かった娘を託す人も決め、歯ブラシ、着替えを用意して心の覚悟をつけてやっていました。

しかし1975年蔣介石が病死したため特赦があり、多くの政治犯が減刑されて出てきました。出獄してきた政治犯たちを私は捜し求め、獄中の状況、特に拷問の後遺症で苦しんでいる政治犯の名前と状態、大陸から来て台湾に身寄りの無い政治犯の困窮度などさまざまなことを聞き出し、わかった範囲で家族に医薬品を届けたり、お金を届けたりもしました。これらの医薬品やお金は私が時々日本に帰りカンパなどで

集まったものを持ち帰ったものです。その頃は日本で台湾の政治犯の状況をすぐさまアムネステイを始め世界に流して、救援に取り組んでくれるアメリカ人の友人、リン・マイルスがいましたし、台湾独立建国連盟の方々も金銭面や医薬品の提供面で随分協力をしていただきました。

そして台湾での活動の過程で、私に協力したいという人々も出てきました。今は統一派の大御所とされている元台湾大学陳鼓應教授、や蘇慶黎、陳菊、そして出獄後間もない陳映真、陳玉璽、李政一など元政治犯たちなどです。彼らは私の救援活動に大いに共鳴して一緒にやるといつてくれました。その当時の彼らの頭の中には、統一、独立といった色分けは全く無く、獄中の劣悪な状況を知っているだけに、あくまでも、人道的な見地から政治犯を救援したいという共通の思いがあり、命を掛けてやるといつてくれました。それによって彼らが私に代わって、獄中の政治犯の

人権への道  
彼らのために私は何ができるのか

面会や、家族にお金を届けたり、多くの情報をもたらしてくれ、それを私が海外に流すということがやりやすくなりました。

しかし私の活動はある家族の密告や、私に協力するために来てくれたあるアメリカ人女性の不用意な言動から国民党当局の知るところとなりました。アムネスティの活動に協力したいという名目で接近してきた特務や、夜中に憲兵や私服が踏み込んできて自宅捜査を受けたり、ヴィザの延長を求めため管轄の外事警察に行くと長時間地下室で中華民国の国籍に変えると強要されたこともありました。政治犯の家族に会う時は実名は決して使用せず、呼び出し電話は暗号を使うようにしていましたが、それもすっかり当局にばれていました。

私が逮捕されることで協力してくれた多くの人たちが巻き添えになること、海外に政治犯の情報を伝えるルートが絶たれること、まだ幼い自分の娘の命を守る義務があることなどを考え合わせ、悩みぬいた末1976年に日本に帰国しました。帰国前には後を継いでやってくれる人を綿密に、慎重に決め連絡法も一応取り決めました。

しかし、帰国した日本で台湾の政治犯の救援にかかわっている組織はただアムネスティのみでした。当時のアムネスティは唯一政治信条や、宗教を理由に逮捕された政治犯の救援活動をする国際的な機関で、私も台湾島内から発した情報は間接的にロンドンの本部に伝えられ死刑求刑を受けている政治犯などに対しすぐさまエージェントアクションをとってくれ国民党政府にとっては大きな外圧となってくれました。しかしアジアの政治犯の問題をヨーロッパ的な人権思想だけで解決できるものでなく、また日本のアムネスティはロンドンの指示によって動いて、台湾の問題も主体的にかかわることが出来ず、台湾島内のひどい状況を知っているだけに強い不満と、何とか日本人の中で台湾の政治犯の救援のための組織を作りたいとの強い思いがありました。幸い1977年東京に「台湾政治犯を救う会」を成立させることが出来ました。関西ではアムネスティ第5グループが台湾の政治犯の問題にかかわっていました。

救う会に参加してきたメンバーは、ユネスコ関係や「林景明を囲む会」の人々、教会関係などが中心でした。

その時の参加者の意識はさまざまでした。

1. 日本の植民地統治に台湾に住んでいたことがある、ある種の贖罪意識など。
2. 台湾＝蔣政権＝それに対抗して台湾人は中国によって解放されるべき、台湾の市民もそれを望んでいるという左翼側からの認識で左翼思想で逮捕された人々の救援のために参加。
3. 台湾独立運動の一環で、蔣政権の敵である政治犯の救援。
4. 教会関係は台湾の長老教会とのつながりでキリスト教的な正義や人道上からのかかわり。
5. あくまでも不当な人権迫害に対し人道的な見地からのかかわり。

日本人に訴えるための集会を行ったり、台湾当局への抗議文や要請文を送ったり、亜東関係協会の前や町の中でのデモ活動やハンスト、街頭でのチラシの配布などを行いました。それ以外にも台湾の政治犯という硬いイメージだけでなく誰にでも台湾に関心を持ってもらうため、『西北雨』という機関紙も発行、台湾の老兵問題や、詩人の紹介、台湾料理まで紹介し、誰でもがわかりやすい内容に編集しました。又絶えず会員の誰かを台湾に送り、政治犯の状況を持ち帰るということを行いました。

その当時は、日本の社会の保守層は国民党政権にべったり、日本のマスコミは中国への異常なほどの配慮から台湾報道はほとんど無く、左翼的進歩的文化人と呼ばれる人たちは、ベトナム戦争や、韓国の政治犯に対しては反対の声を出して、台湾のことは知ろうともせず独裁政権と戦い、民主化運動を進め血を流し、殺されたり、投獄されている人々を黙殺していました。そのような日本での台湾の政治犯の救援活動はとても困難でした。

しかし過去のこのような時代は、はや過ぎ去り、台湾はいまやすっかり民主的な変貌を遂

T3



2004年2月28日、200万余の台湾人が手と手をつなぎ世界最長の「人間の鎖」を形作って台湾を守る決意を内外に示した。写真は台湾中部の濁水溪をまたがる西螺大橋でイベントに参加し、完成を上げる市民たち。

げました。あの国民党独裁支配から、国民直接選挙で選ばれた民進党の陳水扁政権への大きな動き、それは過去の暗黒政治からの決別でもあり、大変大きな意義を持ったものにかかわらず、日本の報道は、トラブルメーカーが総統になったという冷ややかなもので、台湾の人たちの熱い思いを何も伝えませんでした。

かつては国民弾圧の総本山であった総統府で、民進党政権下ではこのような人権回顧展が行なうことが出来ることということに大きな喜びを覚えました。

そして2004年の2月28日、私は苗栗で台湾の人々と共に「人間の鎖」に連なりました。国民党時代は戦々恐々として自分の意思表明をあまりしなかった台湾の人々がこの日は、目を輝かせ立ち上がった姿を目の当たりにしました。台湾の大地、北から南まで500キロを隙間なく人々が手を繋ぎ、「台湾YES! 中国NO!」と台湾人としての誇りを表明したのです。

3月20日の総統選挙は陳水扁の当選を確信させるものでした。人々はもう再びあの暗黒時代には戻りたくないという強い思いが、僅差であっても陳水扁の勝利に導いたのであると思います。

陳水扁総統の第二期就任を祝賀するとともに、過去台湾の政治犯救援にかかわった者としては是非望みたいことは、二二八事件、それに続く白色テロで多くの人々が国民党政権で虐殺され犠牲になっています。被害の当事者や家族によって、被害の事実は続々明らかにされつつありますが、加害者サイドの真相究明、責任追及はほとんど手をつけていられない現状です。

被害者、加害者がきちんと向き合って真相を究明してこそ過去の清算がなされる。再びあのような暗黒時代が繰り返されない為にも、民進党政権の下、是非真相究明委員会を設立し加害者の責任の所在を明確化し、決して免責してはならないと思います。それが犠牲になった方々の魂を安らかにすることであると思うのです。